

「帰国子女教育を考える会」通信 第18号 (2010年1月)

内 容

巻頭言

第55回、56回、57回研究例会 報告
編集後記

巻頭言

変わりゆく私たち

「帰国子女教育を考える会」事務局

小路 清一 (ショウジ キヨカズ)

新たな年を迎え、社会の諸相で「変化しつつある」あるいは、「変化できないでいる」といった所感を持つことの多い今日この頃です。

変化が訪れるときの常として、その変化を歓迎する勢力と、なるべくそれを抑え、変化が生じないようにしようという勢力とがせめぎ合い、時として泥試合・暴露試合の様相となります。政治の場のみならず、それぞれがあらゆる手をつくして自らの利益・信条を守ろうとし、或いは実現しようとして権力・体力・共謀の限りをつくして奔走するのは洋の東西を問わず歴史が示すところでしょうが、今の日本はまさにその真っ只中に飛び込もうとしているように思えます。気になるのは、将来を夢見べき子ども達・若者たちに現状がどのように見えているのかということです。そして、教育の場に携わる私たちが何を語ることができるかということでもあります。

例えば昨今の相撲界の動きは象徴的です。ある改革派の若い「親方」が相撲協会理事改選に立候補したことに賛同した6人もの親方が一門の部屋を破門されました。一方からすれば国技を盛り立てるために、理不尽な慣習は唾棄すべきものと明確に勇気を持って発言している。他方からすれば、長年守られてきた制度(順位)と伝統・作法を守ってこそ国技は意味がある。ただ、ここで留意すべきなのは、両横綱を始め、現幕内力士の約3分の1は外国人力士であるという現実です。果たして本当にこれまでどおりでいいのでしょうか？上記は一例ですが、社会のおよそあらゆる局面でこれだけ大きな変容を既に見せている現在、またそのことがますます加速するだろうと思われる今後を含めて考えたとき、私たちの取るべき態度は必然的に決まってくるのではないのでしょうか？伝統文化の根幹的価値の保全と、一部の人々の都合とが混同されてはいけないと思いますし、「これまでそうだから」と済ますべきではないことがたくさんあると思います。

もちろん、何が変わるべきで何が変わるべきでないか？そのためには何を為すべきで何を為さざるべきかは熟慮を要することですし、独自文化の根幹的価値は伝承すべきと考えますが、若者の視点や社会の多様性を考えると、その表出・表現のされ方、関係の結び結び方はもっと柔軟で多様なほうが伝統も活性化されるのではないのでしょうか？また、若者文化を含め、新たな創造性を発揮している活動やベンチャー企業、国際的な活動をしているNPO等はいち早くその価値を理解・評価され、サポートされてしかるべきではないのでしょうか。

帰国生・外国人子女の教育に関わる私たちの多くにとって、上記のことは教育を考えるうえでの出発点であり、訴えていきたいことの根幹であると自覚されます。「国」の意味すら大きく変容している現在、私たち一人ひとりがこのことを単に「総論」として認めるだけでなく、個々の問題で周囲に働きかけ続け、変革を促すことが肝要でしょう。本会に集う私たちが、互いの立場を超えて実り多い意見を出し合うことができ、この会が皆さんそれぞれの実践の一助となりますことを願って止みません。